

大覚寺大沢池(旧嵯峨院)の調査 (2)

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

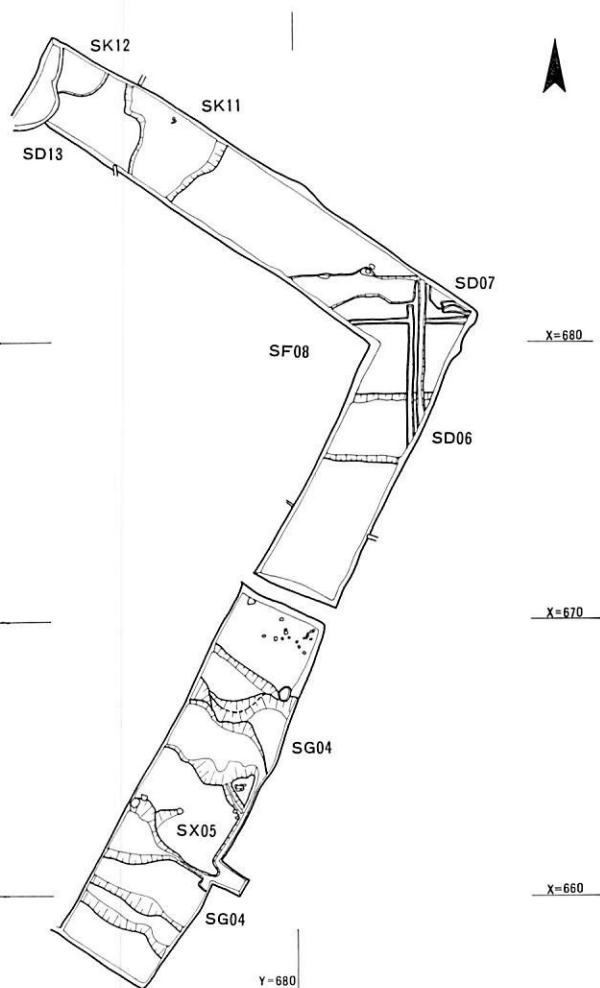
大沢池北岸復原整備事業に伴う第2次発掘調査は、7月19日から8月29日までの42日間にわたって計5カ所約343m²の調査区を設けて実施した。1984年度の調査では、名古曾滝から大沢池に至る区間の北半部において、延長32mにわたって遣水の痕跡を確認したが、南半部は不明であった。従って本年度は、現在のグランド西端に沿って蛇行する溝状のくぼみが遣水痕跡である可能性が高いと判断し、この部分を中心に流水方向を追跡することにした。

調査の結果、この帯状のくぼみはいずれの調査区においても平安時代の遣水痕跡ではなく、後世の攪乱であることが判明した。一方、グランド中央から南には平安時代の遺物を含む整地土層があり、この上面で2条の東西溝にはさまれた道路SF08を検出した。両側溝の埋土からは平安時代前期に属する土器片が大量に出土し、平安時代前半期にはこの付近の空間利用がかなり進んでいたことが推測される。出土遺物の多くが緑釉で施釉された食器類であることから、嵯峨院の家政機関的役割を担う区域であった可能性もある。

また、現在の大沢池北岸部では前述の整地土が現代の切土によって大幅に削りとられていることが判明した。これが単に浚渫したことを示すのか、それとも地続きであった天神島を掘削によって島として切り離したものは即座に判断できない。

今年度の調査では、遣水痕跡の延長を明らかにすることはできなかったが、大沢池北岸の位置に関する新しい知見を得ることができた。残された課題も多く、これらの究明とともに復原整備のより確実な知見を得るために、調査は来年度も継続的に実施する予定である。

(田中哲雄, 本中 真)



道路遺構と大沢池北岸部(85-2調査区)